小学校国語科教育における情報活用スキル習得の指導の在り方
―学校図書館を活用した授業実践を通して―

飯島　和大（杉並区立杉並第八小学校）

１．研究の目的

（１）問題の所在

知識基盤社会の到来から、主体的に情報とかかわりを持ち、各個人からも情報を発信することが求められる時代となった。社会の情報化の進展から「情報活用能力」の育成の必要性は高まり、小学校段階からの体系的な情報教育が必要とされる。野口(2009)は、「児童・生徒には、基礎学力とともに、生涯にわたって主体的に新たな知識や技術を学びとっていく意欲や態度、スキルの獲得が欠かせない。ステレオタイプな授業のパターンからの脱却として、教科書に載っている知識を基本として、それに関連するオリジナルな情報に自らアクセスして調べて発表する（調べ学習）などといった授業づくりが求められている。児童・生徒が主体的に参加でき、“生きる力”を育むような授業である」と指摘している。小・中学校では、学校図書館を利用した教科横断的な指導が求められている。

国語科においては、言語能力の育成をねらう教科特性から情報活用能力の素地となるよう情報活用スキルの習得を指導していく必要があると考えた。塩谷・堀田(2008)は、情報活用スキルを情報活用能力の小学校段階で身に付けておくべき具体化されたスキルとしている。情報活用スキルの習得は国語科教育における「基礎的・基本的な知識・技能の習得」に位置づけ、典型的、象徴的な言語活動を経験させ、すべての教科等の学習の基本ともなる言語能力を身に付けさせるものと言える。情報活用スキルの習得のような言語能力の「引き出し」を意識的に増やす活動を計画的に取り組んでいくことが求められている。

前田(2009)は、現代の子どもの取り巻く状況に即応する形で、高度情報化社会の到来に対し、情報活用能力育成へ学校図書館の充実化が期待されると指摘した。筆者の教育実習や研修を通しても、夏休みの自由研究の題材を調べるといった日常的に児童が学校図書館で調べ学習に取り組む場面は見られなかった。筆者は、国語科の学習指導において教師が計画的に学校図書館の多様な学習活動を仕組まないことや、児童が学校図書館で日常的に調べ学習に取り組むような活動を計画しないことが原因ではないかと考えた。

（２）先行研究・先行実践について

①情報活用能力育成を支える先進的な考え方

情報活用能力育成の先進的な取組として、アメリカ・スクール・ライブラリアン協会の「21 世紀の学びスキル」が挙げられる。初等教育から高等教育までの情報活用能力の目標が体系的にまとめられている。「リテラシーのスキル／クリティカル思考と創造的思考のスキル／情報の収集／知識を用いた意思決定／結論を出し新たな知識を生み出すこと／学びの共同体に生産的に参加すること」が領域として設定され、習得するべきスキルが系統立てられている。日本においても、全国学校図書館協議会が制定した「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」(2004)があり、情報活用能力の技能面については学校図書館教育が中心となって体系化を試みている。

情報活用能力育成の手法としてアイゼンバーグ(M.B.Eisenberg)ら(1990)の研究に「Big 6 Skills Model」がある。課題を解決するために、情報を収集・選択・整理・表現する手

順を 6 つの段階にした「Big 6 Skills Model」は、情報活用能力の習得学習で実践されてきた。6 つの段階は（図 1-2 を参照）、1.課題を明確にする（大きなテーマから具体的なテーマと絞っていくなどの活動）2.情報を集める（百科事典等の利用、インターネットによる検索等の活動）3.情報を選択する（情報の信憑性の確認、出典の明記等の活動）4.情報をまとめる（引用と要約、事実と意見の区別、データの根拠を示す等の活動）5.発表する（新聞、ポスター、スピーチ、意見交流会等の活動）6.ふりかえる（①から⑤までのプロセスをふりかえり、評価する等の活動）であり、学習者は各段階を行きつ戻りつ（フィードバック・プロセス）を伴い、学習の目的に近付いていくものと述べている。情報活用能力の評価研究として、堀田(1994)は、質的に捉える必要性に触れ、日常の行動を記録していくことが求められると述べている。

塩谷・堀田(2008)によって小学校で習得すべきスキルとして「情報活用スキル」が提示された。その後、文部科学省は情報活用能力を課題発見から発信、一連の活動の省察までの諸能力として体系化し、「情報教育の手引」(2010) 等では、教育の ICT 活用や教員の校務軽減のための ICT 利用と同じく、情報活用能力の育成は、情報教育の重点とされた。

図 1-1：研究構想図

「Big 6 Skills Model」の構造

1.課題を明確にする（大きなテーマから具体的なテーマと絞っていくなどの活動）
2.情報を集める（百科事典等の利用、インターネットによる検索等の活動）
3.情報を選択する（情報の信憑性の確認、出典の明記等の活動）
4.情報をまとめる（引用と要約、事実と意見の区別、データの根拠を示す等の活動）
5.発表する（新聞、ポスター、スピーチ、意見交流会等の活動）
6.ふりかえる（①から⑤までのプロセスをふりかえり、評価する等の活動）

図 1-2：「Big 6 Skills」モデルの構造

文部科学省の示す「情報活用能力」の定義は高等教育段階までに養われるべき機能や資質、態度とされ、情報と関わっていく総体的な能力のことを指すのに対し「情報活用スキル」は小学校段階の習得するべき ICT 機器や文字情報等の操作スキル、複数の情報を整理、分類、統合等をするための思考スキルを表したものである。本研究は小学校の情報活用能力育成を対象とするため「情報活用スキル」の習得指導に焦点化し取り組むものとする。

先行実践として、中学校段階での情報活用能力の育成を目指した「Big 6 Skills Model」の授業実践事例は、遊佐(2010) ｓｓの都内私立中学校の取組や袖ケ浦市内の中学校の実践など、図書館活用教育で多く報告されている。しかし、小学校段階での「情報活用スキル」習得を目指した実践事例は少なく、言語能力の習得を担うべき国語科での「情報活用スキル」習得の授業実践への取組が課題であることが明らかになった。

②学習・情報センター機能としての学校図書館

学校図書館には図 1-3 に示すように、3 つのセンター機能があると言われている。それは「読書センター機能」「学習センター機能」「情報センター機能」である。その中でも、学習・情報センターとしの機能は、学校の教育課程（主に授業）を支える役割を担うものである。これからの授業では、教科書を基本としつつも、そこに載っている内容に関連する学習情報を活用して、調べ学習などの児童・生徒の主体的な学びを育む教育方法が重要

となる。教科書に載っている知識を基本として、それに関連するオリジナルな情報に自らアクセスして調べて発表する（調べ学習）などといった授業づくりが求められている。児童・生徒が主体的に参加でき、“生きる力”を育むような授業である。学習に有益なオリジナルな情報（学習情報）は、図書だけでなく、視聴覚メディアや電子メディアなど多種多様なメディアに記録されている。そうした学習情報が記録された多種多様なメディアを組織的に収集、整理、保存、提供し、児童・生徒の主体的な学びを支援してくれる場所が校内には不可欠なのである。調べ学習を系統的に取り組んでいくために、学校図書館の学習・情報センター機能(例えば、学習テーマに関連する資料の図書コーナーやWeb資料のリンク集を作る等)として、学習に関わる情報環境整備が必要であることが捉えられた。

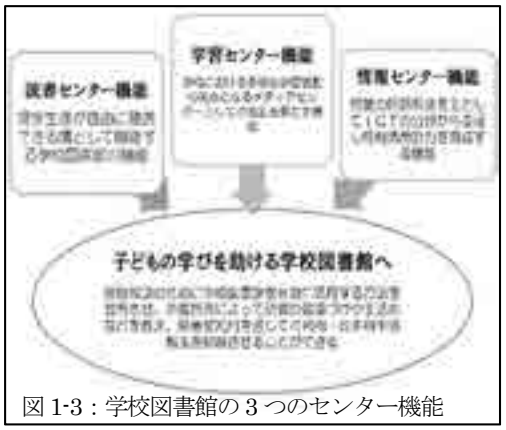


図 1-3：学校図書館の３つのセンター機能

学校図書館を利用した調べ学習の優れた実践事例として、山形県鶴岡市立朝暘第一小学校や島根県松江市立揖屋小学校が見出された。

山形県鶴岡市立朝暘第一小学校では、調べ学習のサイクルを「みつける」「つかむ」「伝える」とし、学校図書館利用計画に位置づけられた調べ学習の教育課程が編成されている。朝暘第一小学校は、図書の時間の指導を主に専任の司書教諭が行い、専任の学校司書が学校図書館の整備・管理を実施している。学級担任は、学級の実態に応じた指導ができるように図書の時間の指導について司書教諭と打ち合わせを行っている。

島根県松江市（旧東出雲町）では、小中学校が連携して「学び方の指導体系表」を作成している。中でも松江市立揖屋小学校の学校図書館での実践は、専任の司書教諭と学校司書、学級担任の三者で授業を運営し、読書で培われる読む力を基盤に、テーマを絞り込む方法、情報収集、読み取り方、発表方法の情報活用力を育てている(図 1-4 を参照)。

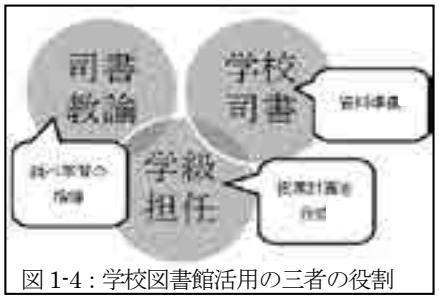


図 1-4：学校図書館活用の三者の役割

連携協力校の学校図書館も、2011 年から学校司書が入り、読書センター機能の充実のほか、学習・情報センター機能を展開するために、調べ学習に取り組むことのできる図書館改善を実施してきた。蔵書構築を改め、調べ学習の基本となる、図鑑(2 年)・百科事典(3 年)・年鑑(5 年)の使い方指導に取り組んでいる。主に国語の学習で必要となる資料については、一人一冊を使って学習に取り組めるように蔵書の整備が行われている。

（３）本研究の目的

本研究の目的は、小学校国語科教育における情報活用スキル習得の効果的な指導の在り方について学校図書館での学習機会を設定することを通して明らかにすることとする。

（４）研究の仮説

研究の仮説を「小学校国語科の「書くこと」の指導において、アイゼンバーグらの「Big 6 Skills Model」の学習過程をたどり、学校図書館を学習の場として設定して実践するならば、児童はテーマを深めながら、自分自身の学びとして課題を意識しながら探究的に学

習するようになるだろう」とした。

そこで、仮説の検証をするため、以下の 3 つの手立てを基に検証授業を計画し、実践分析を行う。

ア.単元全体を「Big 6 Skills Model」の学習過程を参考に設定し、学習に使う情報活用スキルを明確化
イ.学校図書館を学習・情報センターとし「情報収集」「情報整理」学習活動の実践
ウ.児童個人の学習課題を「大テーマ・小テーマ」と位置づけ、追究する活動の設定し、個別の学習課題に応じた図書資料、Web 資料の支援を可視化

児童のそれぞれの学習課題に配慮しながら、学校司書と協働した授業実践の過程を適宜記録しながら、授業開発の視点についても考察することとした。

２．研究の方法及び経過

（1）研究の方法

本研究の目的に基づき、小学校国語科の「書くこと」の領域における調べ学習の先行研究・実践、及び学校図書館の学習・情報センターの機能を活用した授業実践の検討を行う。情報活用スキル習得に効果があると考えられる学習指導計画を作成し、学校図書館を学習活動の場に設定した授業を実践、分析することで指導の在り方を考察する。

（2）研究の経過

上記のことを受け、研究計画を立て、研究を推進した。その概要は以下の通りである。

表 2-1：2 年間の研究計画と実際の経過

先行研究・先行実践調査	1 年次 春学期	・学校図書館、情報教育を利用した調べ学習に関する先行実践の調査 ・先進的な研究実践校の国語科・社会科等の調べ学習スキルの文献調査
検証授業(第一次)の構想と実践	1 年次 秋学期	・連携協力校の教育課程から情報活用スキル育成に適した教科・領域の分析 ・研究の目的、仮説の生成、「Big6 Skills Model」を小学校中学年に修正した学習指導計画作成 ・連携協力校にて、第三学年国語科「書くこと」の検証(第一次)実践と分析
検証授業(第二次)の構造化	2 年次 春学期	・研究の見直しと仮説の生成、小学校段階の調べ学習モデルの創造 ・第六学年国語科による情報活用スキル習得を目指した学習指導計画作成 ・第一学年国語科の授業実践の参与観察、学校教育入門期の学習実態の分析
検証授業(第二次)・研究考察	2 年次 秋学期	・連携協力校にて、第六学年国語科「書くこと」の検証(第二次)実践と分析 ・研究全体を通した成果の整理・研究で残された課題をつかむ
本研究の公開授業等	2 年次 春季休業	・第三学年国語科「書くこと」の検証授業(第一次)の学習指導計画の再構成 ・連携協力校にて、第三学年国語科「書くこと」の検証実践と授業公開

本報告書は、主に検証授業（第一次）・検証授業（第二次）から明らかになったことについて論じることとする。

①連携協力校の第一学年国語科「書くこと」の授業観察の方法

授業観察においては、「授業後の授業者との個々の児童の取組等の協議に関する記録」「観察者の授業中・授業後の学級全体・児童個々の学習についての記録、授業についての省察の記録」を用いて、国語科「書くこと」における情報活用スキル習得状況、学校図書館を学習活動の場に設定した効果を分析する。

②検証授業（第一次）・検証授業（第二次）における授業記録、分析方法

検証授業(第一次)・検証授業（第二次）は、四点「ワークシートを用いた学習活動を実施し、思考や活動内容の記述に関する記録」「教室後方から定点でビデオ録画を用いた学級全体が教室(または学校図書館)で学習活動の取組に関する記録」「授業後に参観している学級担任や学校司書との個々の児童の取組等の協議に関する記録」「授業者の授業中・授業後の学級全体・児童個々の学習についての記録、授業についての省察の記録」を用いて、検証授業(第二次)における情報活用スキル習得状況、学校図書館を学習活動の場に設定した効果を分析する。さらに、児童の調べ学習に対する取組状況について事前アンケートを実施し、情報活用スキルに関する項目の結果から児童の指導前の実態を明らかにしていく。また、単元終了直後と二学期末、児童へ「学習活動への自己評価」「学習した内容について今後どのように活用するか」をアンケート調査し、学習後の情報活用スキルがいかに習得されたかを明らかにする。

３．研究の成果

（１）検証授業(第一次)実践から明らかになったこと

①連携協力校の第三学年における国語科「書くこと」の検証授業(第一次)の概要

ｉ検証授業(第一次)における単元選択の理由等

「文献調査して報告書を書く」力は、他教科でも活用できる言語能力であり、その能力を身につけるための単元である。文献調査する段階では、いろいろな本の中から適切な本を選ぶこと（選書)、選んだ本の中から適切な箇所を探して読むこと（適読）の力を身につけさせたい。

「本で調べて、ほうこくしよう」では、児童が日常の生活の中で気になっていることや、興味のある事柄について図書を使って調べる学習活動を進めていく。本単元では、「冬」をテーマの柱とする。「冬」から連想する言葉（本単元ではここで出てきた言葉をキーワードとする）を全員で出し合い、分類したものから自分の調べるテーマを選ぶように学習活動を設定した。自分の選んだテーマから気になること・調べたいこと・知りたいことなどを基に「問い」をつくり、その「問い」に答えてくれそうな本から情報を収集する。

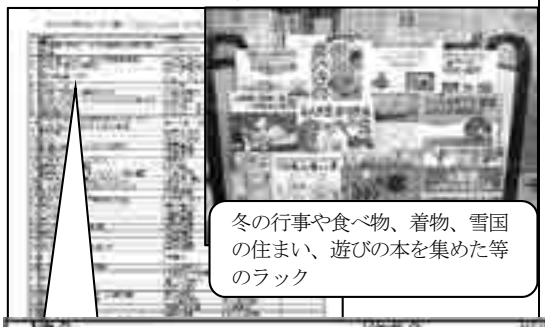
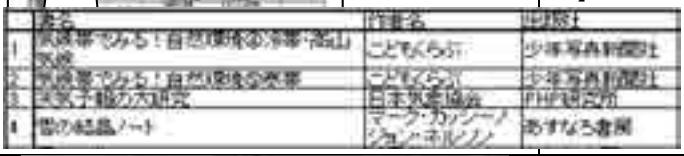
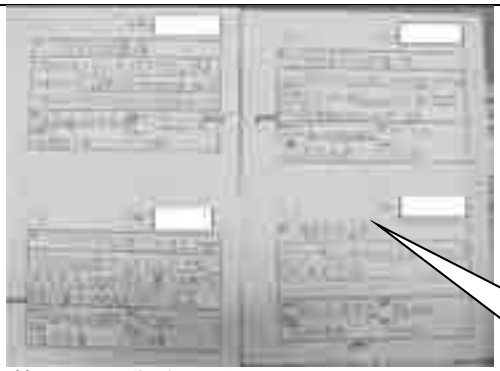
「問い」を答えてくれそうな本から情報を調べる活動は、今後、児童にとって他の調べ学習の際に、学習を進める有用なヒントとなるだろう。本単元では、本で調べた情報を一つずつ情報カードにまとめていき、整理しながら情報収集する技能を習得事項とした。そこで、自分が立てた「問い」と、それに対する「答え」を求めていく学習活動の経過を報告書の基本的な形式に沿ってまとめていくこととした。

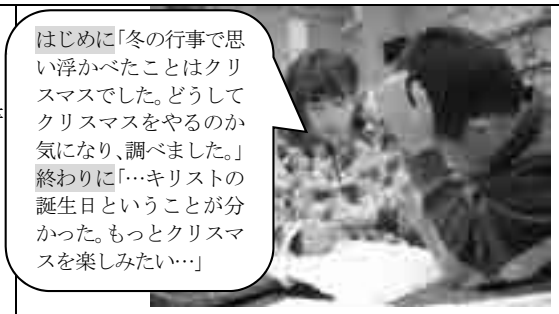
②検証授業(第一次)における児童の学習活動の経過

単元指導計画を作成する際に、以下の情報活用スキル修得指導の手立てを設定し、学習活動を計画した。児童の学習活動にワークシート等や児童の活動の様子を記載する。(表3-1 を参照)

本単元を通して、児童は「分からないことを本から調べることができる」ことを体験することができた。学習の振り返りの場面で、多くの児童が自由記述欄に「本から情報を抜き出すことが難しかった」と書いていた。そのような記述に至った理由の一つとして、学校図書館を利用した調べ学習の経験が少なく、本などの図書から情報を抜き出すスキルが未成熟であることが考えられる。このスキルについては、国語科の時間等を用いて情報を抜き出す訓練を繰り返し積んでいくことが必要であることを示していると言える。

表 3-1：検証授業(第一次)における児童の学習活動の実際と学習指導・情報活用スキル習得指導

時数	活動計画	児童の学習活動の実際	情報活用スキル修得指導の手立て	段階
第一次 1～3時	1．単元全体の見通しをもつ 2．「冬」を題材として、連想する言葉を分類する 3・百科事典（ポプラディア）の使い方について学ぶ 4．関心のあるテーマを選び、ポプラディアで調べ、問いを立てる 5．問いの調べる順位を決める	 テーマ例 ・冬の行事 ・食べ物 ・冬の着物 ・雪国の住まい ・動物の冬眠 ・冬の遊び ※「冬」から連想する事柄を書き出し、黒板に貼り付けている様子 自分のテーマに関する情報を調べる前に、百科事典の使い方の指導を実施した。写真は、例示されたキーワード（10 問）を調べている場面である。	①単元全体を見通す ②単元を貫く言語活動を学習のめあてにする ③学習課題（テーマ）に対するすでにもっている知識を明らかにし、「冬」のイメージを広げる 【ＫＪ法・曼荼羅シート】	つかむ
第二次 4～6時	6．ワークシートの使い方を理解する 7．奥付と出典について知る 8．自分の報告書に必要な資料を学校図書館にある図鑑・科学読み物などから調べて、引用する	児童に提供した資料のブックリスト（左と下部）・ブックトラックの様子（右）  冬の行事や食べ物、着物、雪国の住まい、遊びの本を集めた等のラック 	①基礎となる情報を収集する（事象や周辺にある情報を理解する） ②興味関心を広げ調べる（テーマを深めるために調べる） ③まとめるために必要な情報を集める（絞った内容を調べる） 【百科事典・図鑑・科学読み物等・情報カード】	調べる
第三次 7～10時	9．集めた情報から必要なものを整理し、報告書にまとめるものを選ぶ １０．報告書全体の書き方を理解する １１．「はじめに」の書き方を知り、書く １２．「分かったこと」の書き方を知	 ※情報カード(児童は、分かったことカードと呼んでいる)に図書から調べた情報を記載している	①情報を選ぶための基準を決める（情報量・情報の内容） ②情報を種別に分類し、価値を決める ③必要な情報を選び取る 【情報カード】 これらの情報カードから報告書に書く事柄を選択した。	選ぶ

	り、書く １３．「終わりに」の書き方を知り、「終わりに」を書く		①単元を貫く言語活動に向けて情報を加工する ②効果的に情報を伝えるための工夫を考える ③学習者同士で相互に関わり合い、発表に向かう 【原稿用紙・レポート用紙】	まとめる
第四次　１１～１２時	１４．報告書を読み合い、よかったところを伝え合う １５．自由に作品を読み合い、よかったカードを書く １６．ワークシート等を見返しながら、学習全体をふりかえる	お互いの報告書を読み合い、自分の報告書と比べながら感想を考えている様子 	①交流・発表形式の特徴をおさえる ②相互に評価し合う視点をもつ ③自分の学びの成果や活用したスキルを確認する 【コメントカード】	伝える
	１７．学習について自己評価する	学習の振り返りカードや、事後アンケートから 特に頑張ったこと ・「「わかったこと」が大へんでした。（かくのが）」 ・「文をきれいにかくため。（くわしく）・友だちのよい所を見つけられた。」 ・「本をつかってたくさん調べてほうこく書を書けたので特にがんばったんじゃないのかな？と思っています。」	①学習ノートや成果物を見直す ②教師のフィードバックを聞く ③単元全体を通して学習態度や到達度、技能の活用について振り返る 【事後アンケート】	ふりかえる

また、情報収集のスキルとして、児童は「調べるための本に種類があり、調べたい事柄によって使い分ける有用性」について気付いていった。調べたい・明らかにしたい事柄に応じたメディアを選択する力を指導していくのに効果があったと言える。

（２）検証授業（第二次）実践から明らかになったこと

①連携協力校の第六学年における国語科「書くこと」の検証授業（第二次）の概要

ｉ検証授業（第二次）における単元選択の理由等

調べた情報を整理し自分の意見としていく学習内容として、光村図書６学年教科書に掲載されている「『平和』について考える（ 自分の考えを明確に伝えよう）著：大牟田稔」の題材が適していると判断した。単元は、原爆ドームをキーワードに著者が「平和」について論じた文章を第一次に扱うことから、夏季休業明けの９月に計画した。本単元で目指す児童像は、「平和について自分の考えを持ち、意見文を書くことができる児童」とする。

連携協力校の第六学年にて、国語科 13 時間で検証授業を実施。単元は、情報活用スキルから重点的に指導するポイントを選択した。

・テーマについて資料を基に学習し、調べ学習への課題意識をもたせてから調べる活動に取り組むこと
・資料収集は、学校図書館資料や教師作成の Web ページ資料を対象とすること
・調べた資料の確かさについて、出典を明らかにし、複数の資料の中から説得力のある確かさが高い資料を自身で検討するリテラシーの要素を指導内容に含ませること

前記のポイントからワークシートを作成し、調べ学習の要点については掲示物による視覚的な教具を作成した。

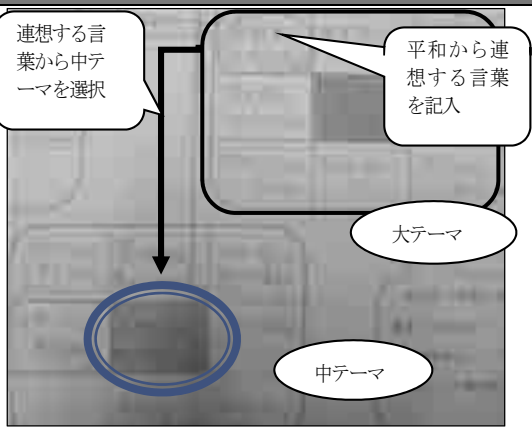
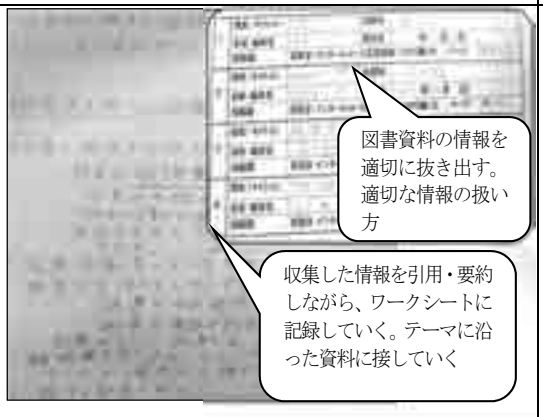
ⅱ調べ学習を円滑にするための方策

学校図書館の提供できる資料について事前に司書と打ち合わせ、原爆や戦争兵器、戦争被害にまつわる特設コーナーを設置してもらい、パソコン室の活動では児童の学習課題に応じたWebページをリンク集にまとめ、提示した。

②検証授業(第二次)における児童の学習活動の経過

単元指導計画を作成する際に、以下の情報活用スキル修得指導の手立てを設定し、学習活動を計画した。児童の学習活動にワークシート等や児童の活動の様子を記載する。

表3-2：検証授業(第二次)における児童の学習活動の実際と学習指導・情報活用スキル習得指導

時数	活動計画	児童の学習活動の実際	情報活用スキル修得指導の手立て	段階
第一次 1～4時	○『〈資料〉「平和」のとりでを築く』を読み、自分の考えを持つ ・トピックに関する問題について知っていることを述べたり、確認したりして、既有の知識と結びつける。		①単元全体を見通す ②単元を貫く言語活動を学習のめあてにする ③学習課題（テーマ）に対するすでに持っているイメージを広げる 【曼荼羅シート】	つかむ
第二次 5～9時	○自分の考えを証明する資料を収集し、選択してまとめる ・調査を進めたり、問いに答えるために、どのような情報が必要かを明らかにする。 ・図書館の組織や特別な部分を利用することを理解する。		①基礎となる情報を収集する段階（事象や周辺にある情報を理解する） ②興味関心を広げ調べる段階（テーマを深めるために調べる） ③まとめるために必要な情報を集める（絞った内容を調べる） 【情報記入シート・学校図書館・インターネット】	調べる
第三次 10～11時	○資料を比較し、関連付けながら、自分の考えを深める ○自分の主張を伝えられる意見文を書く ・意見を生成するために、重要な事実や適切な情報を使う。		①情報を選ぶための基準を決める（情報量・情報の内容） ②情報を種別に分類し、価値を決める ③必要な情報を選び取る 【意見文構想シート】	選ぶ

		児童自身が他者から聞いた経験からの記述 ところが先日、祖母から戦争の話を聞いておどろいた。…祖母が言っていたのは、防空ごうについての体験談だった。…この時子供だった祖母の気持ちをかんがえると、どれだけこわかったのか想像がつく。 61BMK **資料の引用と、それに対する思考の記述** その本は「あの日家族が消えた」という本です。…戦争をすると、関係ない人も、まきぞいになったり、核兵器をつかわれてしまうおそれもあるので、おそろしいと、心から思いました。 61BWG	①単元を貫く言語活動に向けて情報を加工する ②効果的に情報を伝えるための工夫を考える ③学習者同士で相互に関わり合い、発表に向かう 【原稿用紙】	まとめる
第四次　12～13時	○スピーチ原稿を作り、スピーチの交流会をする ・意味を伝えるために、分かりやすく話をする。 ・他の人の考えに敬意を払って対応する。 ○単元全体を含めて、学習について振り返る ・成果とプロセスを改善するために、他の人の意見を真摯に聞く。	**61GSK スピーチ**「皆さんも口論やケンカはイヤですよね。私は口論やケンカは積み重なると戦争に繋がると思います。…皆さん、私と一緒にケンカのない社会を作っていきませんか。」 **感想交流**「…自分の体験や実際にあったこと(収集した情報)をまじえて、自分の意見を伝えていたのが良かったです。」**コメントカード**「相手に、伝える口調を使っていて良かったです。」	①交流・発表形式の特徴をおさえる ②相互に評価し合う視点をもつ ③自分の学びの成果や活用したスキルを確認する 【コメントカード】	伝える
		○質問項目「ほかに意見文を書いて、主張したいことはありますか。」(自由記述) **61GOK**「私が最後にかいた、平和とは、やっぱり笑っていて、幸せであることと書いたけど、どうして涙を流すのか、なぜ笑うのか、どうして幸せなのか、こんなことを調べたいです。」 **61GTS**「難民だけでなく、戦争でどのような人々が被害を受けて、や、なぜ戦争へとなってしまったのか、などについて調べ、主張したいです。」	①学習ノートや成果物を見直す ②教師のフィードバックを聞く ③単元全体を通して学習態度や到達度、技能の活用について振り返る 【事後アンケート】	ふりかえる

学習活動に対応する形で、情報活用スキル指導を組み込んでいくことで、児童に身に付けさせるべき思考スキルやICT機器の操作スキルを明確にすることができた。学習活動でも指導するべき情報活用スキルが明らかになり、学習内容の深まりを見取りやすくなった。

③児童が学習課題を捉えた段階の分類化

意見文・ワークシートの記述分析から、6 つの段階(特に、「つかむ／調べる／選ぶ／まとめる」の段階)を相互に行き来しながら学習活動に取り組む児童の実態が明らかになった。授業者が記録した学習経過を分析することで、児童の学習課題を捉えた段階が大きく 3 つに分類できることが分かった。

表 3-3：児童の学習活動から明らかになった学習課題を捉えた段階の 3 分類

A 群(56.5%) 教師や司書の提示した資料や、教科書の内容を参考に情報を収集した児童

指導計画の第一次で読解に取り組んだ「平和のとりでを築く　著：大牟田稔」で題材として扱われている「原爆ドーム」や「核兵器」を中テーマとして、図書資料や Web 資料を収集、選択した。つまり、A 群は調べ学習の課題設定を中心資料の読解時に行っていたといえる。授業者のねらいである「資料読解を通して平和の考え方を深めさせたい」は達成されているが、テーマの多様性や内容の創造性という点においては、児童に自由な発想をもたせたかった。

【具体的な児童 61BTS の学習経過】

最初の問い：世界のみんなが仲良くなって安心して暮らせることが平和。**学校図書館：**戦争がなくなるために何が必要なのか、兵器がどうやったらなくなるのかということを考え、資料を集めていた。**パソコン室：**東世界で多くの核兵器が残っていること、原爆に関する新聞社の報道を記録している。**意見文の主張：**『わたしが考える「平和」は内戦がなく同じ物どうしの争いがなく難民で固まっている人が少ない世界だ。』

B 群(26.1%)自分で立てたテーマや主張を基に情報を収集した児童

児童自身が自分の興味関心のあるテーマを設定し、それに応じた資料を収集し、自分のテーマに適した資料を選択した。つまり、単元の導入時に「平和」についての調べ学習の課題設定を行っていたといえる。調べる段階においても自分自身の主張をもち、その主張を捉えた資料を収集していた。調べ明らかになったことから、新たな課題設定の場を設けることが必要だろう。

【具体的な児童 61BGT の学習経過】

最初の問い：僕の考える平和は、差別がない世界だ。黒人差別をなくす事が平和だ。**学校図書館：**白人による黒人差別を中心に資料を集めている。アメリカでの黒人はいまだに、貧しく社会進出しづらい環境ということに気付く。**パソコン室：**Web 資料から、ユダヤ・南アフリカ等の差別について資料をあつめていた。**意見文の主張：**『「差別」がない世界。誰とでも争わず、仲良くする事、それがぼくの平和でした。』

C 群(17.4%)情報収集の最中に目的を見直し、主張に応じた情報を収集した児童

指導計画にあるテーマ設定の段階のテーマから、資料収集をしていく中でテーマを見直していった。収集した資料を読み解いていく中で自身のテーマを深化させ、具体的な主張を展開することができた。つまり、「つかむ」⇒「調べる／選ぶ」⇒「つかむ」⇒「調べる／選ぶ／まとめる」のように調べる段階から「つかむ」段階へ立ち戻り課題設定を行っていたといえる。先行文献にも 6 つの学習段階を積み上げていくだけではなく、「各段階を行きつ戻りつを繰り返しながらたどっていくことにより、常に新たな課題を解決していける力を育成することを目指すもの」とされているように、C 群の児童は、新たな課題を解決していける力を身に付けていった。

【具体的な児童 61BGT の学習経過】

最初の問い：子供が教育を受けられるようになれば、平和になる。**学校図書館：**第一次世界大戦について調べていたが、テーマを振り返り、子供の命を守るための取組について考えている。**パソコン室：**子供の権利条約や、学校で学ぶ権利について調べていた。戦争で、子供が真っ先に被害者になることや、日本では考えられないような「学校で勉強することができない」状況について自分なりに考え始めていた。**意見文の主張：**『私が考える平和は子供がしっかり教育を受けられる環境を作るということです。』

A 群への指導の成果と課題―課題設定「つかむ」段階における手立ての充実

A 群の児童は筆者の「平和への思い」を自身の学習課題を転移させたことで、意見文を書くための資料収集の活動に取り組んでいった。「平和のとりでを築く」を読解し、児童は「原爆ドーム」を題材した筆者の考える「平和への思い」を捉えていったと解釈できる。

A 群の児童が多様な学習課題に展開していくことが今後の課題と考える。A 群の児童が、多様な課題を設定して論じていけるようにするために、課題設定「つかむ」段階で学級内の他の児童の多様な意見に触れ、学習課題を見直す機会を設けることが必要だろう。

B 群への指導の成果と課題―資料収集「調べる」段階における手立ての充実

学校図書館での情報収集活動の第一時間目に、個別の支援から B 群の児童は意見文の学習課題を「中テーマ」で取り組んで行きたいと考えているが、「中テーマ」と異なる資料収集に取組んでいたことが課題として明らかになった。「中テーマ」に振り返らせる発問や関わりのある資料を紹介する等の支援を行った。だが、多角的に資料収集を行っていた児童は意見文を各段階でそれらの資料から得た情報を取り入れて思考していた。学習課題を捉える前の段階で、テーマへの関心を広げる情報収集を取組むことが意見文に効果的であったことから、学習課題を設定する場面においても資料収集する活動を取り入れることで A 群の児童にも効果があったのではないかと考える。

C 群への指導の成果と課題―6 段階の学習サイクルを促すこと

先行文献から 6 つの学習段階を積み上げていくだけではなく、各段階の行きつ戻りつを繰り返したどることで、常に新たな課題を解決していける力を育成することを目指すことが求められている。C 群の児童は新たな課題を解決していける力を身に付けていったと考えられる。A 群 B 群へ、C 群のようにより高いスキル習得をできるよう、資料収集から思考

したことを基に、新たな課題を設定して情報収集することができるように指導する手立てが必要と考えられる。

４．まとめと課題（総合省察）

（１）情報活用スキル習得指導と「Big 6 Skills Model」の有用性と課題

単元を通して学習計画を 6 段階に分けることは、教員が情報活用スキルの習得を意図して単元構造を設定することや指導していくことに有効であった。各学習活動に適した情報活用スキルを指導していくことができる。

①発達の段階に応じた「Big 6 Skills Model」の作成

検証授業(第一次)にて、第三学年での指導を行った際に、6 段階の学習指導を明確に区分することは、児童の思考を阻害させる可能性があることが課題として挙がった。そのことから情報活用スキル習得を図るために学習活動の区分の工夫や、6 つの段階を発達に応じて系統立てて指導していく必要があることが明らかになった。図 4-1 のように、6 段階の学習活動を統合させて扱うことが配慮として考えられる。特に検証授業(第二次)から、情報収集(調べる)場面と情報整理(選ぶ)場面については、情報の価値判断等の高度な思考スキルを求めるため、高学年まで情報収集(調べる)場面と情報整理(選ぶ)場面は統合することが望ましいと考えた。手立てとして調べた情報がそのまま整理されるようなワークシートの作成や、学習活動を繰り返し行っていく等、指導の改善が必要であり、今後の課題となった。

図 4-1：小学校における「Big 6 Skills Model」統合図

②情報活用スキルの活用に向けた継続・発展的な学習活動

堀田（1994)は､情報活用能力の評価方法を質的に捉える必要性に触れ、日常の行動を記録していくことが求められると述べている。だが、検証授業(第一次・第二次)では、児童が日常生活の中で習得した情報活用スキルを活用している場面までは観察・記録することはできなかった。「21 世紀の学びスキル」は情報活用スキルにある「ICT 機器操作スキル・思考スキル」の他「スキルを扱う態度」についても言及している。指導者は態度の育成まで見通しをもち指導する必要がある。学級内での学習指導だけでは限界がある。学校の教育活動全般で情報活用スキルを進めていくこと、児童の学びを支える学校図書館の学習・情報センターを意図的に利用していくことが課題となる。

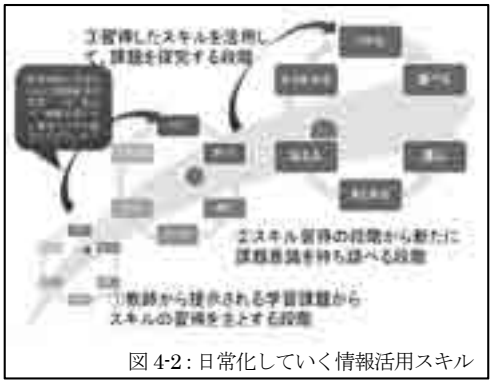


図 4-2：日常化していく情報活用スキル

（２）情報活用環境をコーディネートする司書教諭と協働による授業実践の重要性

情報活用スキル育成は、学級担任の指導や学校司書の図書支援だけでは成立していかない。司書教諭は、学校教育全般で意図的に情報活用スキル指導を組み込み、学校図書館の学習・情報センターを意図的に利用していくように教育課程を編成すること、さらに授業者と学校司書の繋がりをコーディネートしていくことが必要となる。鶴岡市立朝暘第一小

学校や、松江市立揖屋小学校のような組織による学校図書館を活用した情報活用能力育成にしていくためには、司書教諭・学校司書・学級担任の協働による実践が不可欠となる。

５．主な参考・引用文献

安達一寿・井口磯夫「情報活用能力の行動評価に関する基礎研究」日本教育情報学会第 10 回年会、1994 年

アメリカ・スクール・ライブラリアン協会編「シリーズ学習者のエンパワーメント第 1 巻 21 世紀を生きる学習者のための活動基準」全国学校図書館協議会、2010 年

大髙泉「問題解決学習」『教職研修「学力向上を目指す授業と評価」』教育開発研究所、2010 年

門脇久美子「学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/099/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2013/09/06/1339307_04.pdf（最終閲覧 2014 年 3 月 30 日）、2013 年

鎌田和宏「学校教育カリキュラムと学校図書館」『学習指導と学校図書館』全国学校図書館協議会、2010 年

桑田てるみ編「6 プロセスで学ぶ中学生・高校生のための探究学習スキルワーク」全国学校図書館協議会、2012 年

狛江市立緑野小学校「考え深める児童の育成－言葉の力を基盤にして－」2009 年

塩谷京子・堀田龍也『小学生に情報活用スキルを習得させるためのガイドブックの開発と効果』教育情報研究第 24 巻第 4 号、2008 年

塩谷京子・堀田龍也『図書館教育と情報教育の推進のための環境整備に関する調査』日本教育情報学会第 24 回年会、2008 年

全国学校図書館協議会「学校図書館の活用名人になる」国士社、2010 年

全国学校図書館協議会「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」2004

全国学校図書館協議会「インフォメーション・パワー学校図書館メディアプログラムのガイドライン」全 SLA 海外資料委員会訳、2010

袖ケ浦市教育委員会生涯学習課「第二次袖ケ浦市子ども読書活動推進計画平成２３年度～平成２７年度」袖ケ浦市教育委員会、2011 年

高階玲治「習得･活用･探究の学力形成」『教職研修「学力向上を目指す授業と評価」』pp26-27、2010 年

鶴岡市立朝暘第一小学校「学校図書館活用教育ハンドブックⅡ」国士社、2006 年

鶴岡市立朝暘第一小学校「みつける　つかむ　伝えあう」国士社、2006 年

鳴島甫「国語科教育の方法」『新たな時代を拓く　小学校国語科教育研究』学芸図書株式会社、2009 年

野口武悟「学校図書館の理念と教育的意義」『学校経営と学校図書館』放送大学教育振興会、2009 年

堀江祐爾「国語科における活用型授業づくりの考え方―言語活動によって活用力を育てる―」『「活用力」を育てる授業の考え方と実践』株式会社図書文化社、2008 年

堀川照代「島根県の子どもの読書活動の推進及び松江市立揖屋小学校の図書館活用教育」2013 年、http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/79/File/dai7-chiiki.pdf（最終閲覧 2014 年 3 月 30 日）

堀田龍也ら「情報活用能力の行動評価に関する基礎研究」『年会論文集』日本教育情報学会、1994 年
前田稔「教育行政と学校図書館」『学校経営と学校図書館』放送大学出版協会、2009 年
文部科学省「情報教育に関する手引」2010 年
遊佐幸枝「学校図書館発　育てます！調べる力・考える力」少年写真新聞社、2010 年
Eisnberg,Michael B;Berkowitz,Robert E「information problem-solving:the big six skills approach to library & information skills instruction」Norwood,N.J.、Ablex Publishing、1990